（第３種郵便物認可）　高知新聞　2026、10、20付

ビキニ「声上げ続けよう」

被ばく遺族ら室戸市で交流



【室戸】1954年に米国が太平洋・ビキニ環礁で行った水爆実験で被ばくした元船員やその遺族らによる懇談会がこのほど、室戸市内で開かれた。静岡県焼津市のマグロ漁船「第五福竜丸」元乗組員、大石又七さん＝2021年に87歳で死去＝と海上保安庁の測量船「拓洋」の元乗組員、永野博吉さん＝1959年に34歳で死去＝の遺族も参加。水爆実験の被害者として声を上げ続けることの重要性を確認した。

第五福竜丸はビキニ環礁の北東を航海中に水爆実験に遭遇し、乗組員は放射性降下物「死の灰」を浴び、無線長が約半年後に亡くなった。拓洋は58年、ビキニ環礁で海洋調査を行っていたところ、放射性物質を含んだスコールに見舞われた。約1年後、首席機関士だった永野さんが急性骨髄性白血病で亡くなった。

17日の懇談会に参加したのは、大石さんの娘、田中佳子さん(65)＝東京都＝と永野さんの娘、安希巳(あけみ)さん(67)＝兵庫県。今年5月、高知市内で開かれた「ビキニデーin高知」の集会に安希巳さんが参加。54年の水爆実験で被ばくした元船員を父に持つ下本節子さん(75)らと知り合い、「ビキニ被災を支援する室戸の会」が2カ月に1度、室戸市で開いている懇談会「お茶会」に2人を招いた。

▲水爆実験による被害を共有し合う田中佳子さん＝左から2人目、永野安希巳さん＝右端＝ら（室戸市佐喜浜町の佐喜浜市民館）

会では、自己紹介をしながら、田中さんは「父は水爆実験による責任の所在をはっきりさせない日本政府へのいらだちから、700回以上の講演活動を行った」と説明。「ビキニ被ばくについて知らない人は多い。同じ過ちを繰り返さないためにも、父が経験した事実を伝え続けたい」と語った。

安希巳さんは「父は帰港した後、地元で『原爆の永野さん』と呼ばれ、銭湯に行くのをやめ、自宅に風呂を造った」と紹介。「さまざまな葛藤や苦しみを抱えながら父は亡くなった。父がどんな思いで何を経験したのか知りたい」と心の内を語った。

会には、3人の「元船員の娘」のほか、元マグロ船員の久保尚さん(89)や小笠原勝さん(92)も出席。小笠原さんは「54年の事件を政府がちゃんと調査していれば、その後の被害は防げたのではないか」と憤り、安希巳さんは「今後も同じ思いを持つ者同士、つながって声を上げ続けていきたい」と思いを共有していた。（人見彩織）